

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

第3回業務推進全体会合

逐語録

(木村^浩) それでは、第3回の業務推進全体会合を始めたいと思います。

まず、資料に番号をつけていきたいと思います。まずは議事次第があります。3-0 でお願ひします。次に、前回の全体会合の議事録が3-1です。次に、A3の紙を半分に折ってある資料があると思いますけれども、3-2 でお願ひします。そのあとに4種類のパワーポイント資料があると思います。「プロジェクトの目的・手法・枠組み」が3-2-1、「市民と専門家の意識調査」が3-2-2、「コミュニケーション・フィールド『フォーラム』の効果」が3-2-3、「『フォーラム』の社会実装に向けて」が3-2-4です。実際には、これらを順番に重ねて、A3の紙の中に折りこんで、皆さんに配布する、という形になります。こちらが明日のシンポジウムの配布資料になります。よろしいでしょうか。

本日の議事ですけれども、アンケートとインタビューについて、一通り分析結果のまとめができましたので、こちらをご紹介しながら、いろいろディスカッションをしていければと思います。時間があれば、システム化について、ご意見をいただければと思います。

資料3-1の議事録案ですけれども、すでにメールでお送りしていますので、何かあればご指摘いただければと思います。

1. アンケート・インタビュー分析結果の検討

(木村^浩) それでは、1つ目の議事に入りたいと思います。

3-2-1の「プロジェクトの目的・手法・枠組み」は、何度もお話ししている内容ですので、本日は省略します。

アンケートの分析結果について、資料3-2-2に基づいて、土田先生からご紹介いただければと思います。25分の資料ですので、そのくらいの時間で、ピックアップしながらお願ひします。

(土田) はい。発表時間は25分ですので、発表するのは主要部分だけです。調査項目は他にもあります。また、去年と同じところもありますので、飛ばしながらご紹介したいと思います。

スライド1は、皆さんご存知の通りです。原子力学会の調査が母体になっているというお話です。

スライド2には方法が記載されています。

まず、毎年の調査結果をお示ししますと。

結論としては、住民と専門家の間には、ほとんど正反対と言えるほど大きな認識ギャップがあると。

まず、原子力発電の安全を確保することは可能かどうかという質問ですが、首都圏住民は、福島事故の後なので、確保できないという意見が主流になっています。それに対して、原子力学会員は、確保できると答える人がほとんどです。

次は、原子力発電を利用すべきか、廃止すべきか、という質問です。首都圏住民は、2011年1月（2010年度）までは、4割近くが原子力発電を利用すべきだと思っていたのです。福島事故後、それが逆転し、廃止すべきだという回答が過半数を超えています。特筆すべきは、時間の経過とともに、これが元に戻るのではなくて、廃止すべきだという意見が徐々に増えているということです。原子力学会員のほうも、福島事故のインパクトがあり、2012年1月（2011年度）では利用すべきだという積極意見（赤色）が減っています。2013年1月（2012年度）の調査で元に戻るような動きが見えたのですが、2014年1月（2013年度）の調査で、「利用していくべき」という意見が減っていますので、学会員も揺れ動いているという形になります。

次に、原子力発電の安心－不安の意見ですが、これは利用－廃止とほとんど平行です。しかし、首都圏住民の場合、利用－廃止に比べ、はっきり「不安」と回答する人の割合が多いです。「不安」に関しては、統計的に有意にはならないと思いますが、福島事故で不安が上昇し、その後徐々に下がってきています。「安心」という回答も、少しずつ増えてきています。したがって、先ほどの利用－廃止に戻ると、感情的に嫌だという反応ではなくて、不安はなくなってきたけれども、でも廃止したほうがいい、と考えている人が増えている、と読めます。統計的に意味のある変化とまでは言えないと思いますが、方向性としてはそうなっています。原子力学会員も、福島事故後、意見が揺れています。ただ、原子力学会員は、徐々に「安心」との回答が増えています。

次は、原子力発電と日本の経済発展との関係ですが、これこそ意見が正反対になっています。首都圏住民は、原子力発電がなくても日本は経済的に発展していけると考えている人が多く、その割合は2013年1月よりも2014年1月のほうが増えています。原子力学会員のほうも、原子力発電がなくても発展できると答える人が、わずかではありますが増えていますし、発展できないという人が減ってきています。

次に「ムラびと」に関する話です。首都圏住民には、原子力に関わっている人・組織をどう思うか、と質問しています。学会員には、一般の人たちからどう見られていると思うか、と質問しています。

「価値観・考え方が一般の人たちとずれている」という項目では、首都圏住民でずれていると思っている人は3分の1程度です。それに対して、原子力学会員は、7割を超える人たちが、自分たちはずれていると思われていると思っています。

次に、「原子力に携わっている人たちに感謝している」という項目です。首都圏住民は、半分以上の人が感謝していると答えています。一方、原子力学会員は、半分以上の人が感謝なんかされていないだろうと思ひ込んでいます。このようなずれが観測されています。

次に、フォーラムに参加していただいた方はどういう人たちだったのかということで、3つの質問で見えています。

首都圏住民の母集団と、首都圏住民のフォーラム参加者を比較しています。まずは原子力発電の利用－廃止の意見を見てみます。2013年のフォーラムの参加者は、母集団に比べ、「どちらかといえばやめるべき」という人が少なく、はっきりと「やめるべきだ」と答える人が多かった。2014年の場合は、「利用していくべきである」という積極意見はなく、「どちらかといえば利用していくべき」という意見も母集団に比べて少ない。そして、「やめるべきだ」という意見がやや多い。母集団よりも否定的な意見に偏った人が集まっている、ということが見えます。

原子力発電利用の安心－不安でも同じ傾向があります。母集団には、わずかではあります。が、「安心」という人もいるのですが、今年のフォーラム参加者は「不安」だと答える人が多くなっています。

原子力発電と経済発展の関係については、それほど偏ってはいないのですが、2014年のフォーラム参加者は、どちらかといえば否定的な方向に少し偏っているといえます。総じて、今年の参加者は、母集団と比べ、原子力に対してやや否定的な人が集まっているという形になります。

今度は原子力学会員です。まず、原子力発電の利用－廃止ですが、2013年は母集団とほぼ一致した構成でした。今年は、「やめるべきである」と答えた人が1人いました。サンプルが9人しかいませんので、やはり目立ちます。

次に、原子力発電利用の安心－不安ですが、「不安」側の回答をした方が2人います。

経済発展との関係も、母集団からややずれていると言えます。原子力学会員のほうも、総じて、原子力学会員の母集団と比べると、否定的な方向に少し偏っています。

結論としては、2013年のフォーラム参加者は母集団とほぼ一致しているは見せましたが、今年の場合は、首都圏住民参加者も学会員参加者も、少し否定的な方向に偏った人たちが集まった、ということになります。

次に、フォーラム参加者に対して、事前と事後の調査をしていますので、目立った点をいくつかご紹介します。

目に見えて変化したのは、首都圏住民参加者の不安です。フォーラム参加後は不安が軽減しています。数字が大きくなっているのは、安心が大きくなったということです。これは2013年、2014年共に見られました。ですから、このフォーラムは、首都圏住民の原子力発電に対する不安が少し和らぐという効果がありました。けれども、利用－廃止につい

では前後で変化がないし、経済発展に関しても変化はありません。つまり、理性的な判断には寄与していないけれども、感情的に不安が減るということです。

原子力学会員の場合は、この 3 つの項目については、フォーラム前後で変化が見られませんでした。

次は、原子力に携わっている人・組織をどう思うか、一般の人たちからどう見られていると思うか、という質問です。黄色で塗りつぶしたところはポイントが増えているところ、緑で塗りつぶしたところはポイントが減っているところです。

2013 年の首都圏住民を見ると、「人ではなくて組織に問題がある」「倫理的に問題がある」のポイントが増えています。原子力に携わっている人たち総体に対する見方は変わっていない。けれども、原子力の組織、それから原子力そのものが問題なのであって、人が悪いわけではない、という形に動いたように見えます。

今年の首都圏住民は、「原子力のことは専門家でなければ分からない」が増えていますし、「原子力に携わっている人に好感を持っている」も増えています。今年の場合は、原子力に携わっている人たちはいいい人たちみたいだから、私たち（市民）はあまりうるさく文句を言わないで黙っていきましょうか、というような変化が見えています。

それに対して、原子力学会員は、去年は劇的な変化を見せました。私たちはそれほど嫌われているわけではないのか、ということで、あらゆる項目に変化が見られます。

今年は、去年ほどの変化はありません。変化があった項目は、「権力志向」とは思われていないようだ。「原子力のことは専門家でなければ分からない」と一般の人たちも思っているようだ。「何も印象を持っていない」ということもないようだ、などです。総じて、我々は信頼されているし、一般の人たちに専門家として見られているようだ、という変化です。去年の原子力学会員の場合は、一般の人たちと仲良くなれる、みたいな形になったのですが、今年は、フォーラムを経験したことで、住民も学会員も「やはり専門家は専門家だ」とより強く思うようになった、という結果になります。

次は、フォーラム終了後の質問紙にしか載っていなかった質問です。

まず、一般の人々と原子カムラの間に境界があると思いますか、という質問です。2013 年は、首都圏住民参加者の 6 割が「あると思う」と答えています。「どちらかといえばあると思う」を加えると 9 割になっていました。今年の場合も、「あると思う」「どちらかといえばあると思う」を足すと約 8 割になるのですが、「どちらかといえば」の割合が多くなっています。また、「ないと思う」と回答した人が 2 割います。それに対して、学会員参加者は、2013 年は「ないと思う」と回答する人も多かったのですが、今年は、「ないと思う」と答えた人は 2 人しかいません。

次に、その境界を越えることができると思いますか、という質問です。結論を言えば、大部分の人は、この境界を越えられると思っています。

以上です。本当にごく一部しか言っていませんが。

(木村_浩) はい。明日の内容はこのような形になります。

竹中君から発表してもらった後に、まとめて議論したほうがいいですか？ それとも、ここで一旦切りますか？

(竹中) 切っていいと思います。

(木村_浩) では、今の発表について、質問やコメントがあればお願いします。

—— 「フォーラムに参加したことによって首都圏住民参加者は、原子力発電の利用についての不安が軽減した」という表の数字はどういう意味ですか？

(土田) これはきちんと説明するべきでした。各設問に、「やめるべきだ」「どちらかといえばやめるべきだ」「どちらともいえない」「どちらかといえば利用していくべきだ」「利用していくべきだ」というような5つの選択肢がありましたよね。それに1から5まで数字をつけて、その平均値がこの表に出ています。ですから、3がどちらでもないという形になります。

(木村_浩) 2014年の参加者はどちらかといえば原子力に否定的な方向に偏っていた、という結果でしたけれども、これはインタビューの定性的な分析ではどうでしたか？

(竹中) それに関しては、逆になっていると思います。今年のほうが、反対意見が強くないように思えます。

(土田) これはフォーラム参加前のデータなので、フォーラム参加後はそういうことを言わなくなったのかもしれませんが。

—— スライド22は、数字が大きいほど、その問いに対して肯定的ということになっているわけですね？

(土田) はい。

—— 今年の原子力学会員参加者は、「自分たちだけ利益を得ている」が3.25になっているということは、フォーラムが終わった後でも、原子力に携わっている人たちは利益を得ていると思っているわけですね。3.25は中間より大きい値ですから。

(土田) いえ、今の議論は違います。原子力学会員参加者に対しては、一般の人たちからそう見られていると思うか、という質問をしていますから、自分たちは利益を得ていないと思っています。けれども、一般の人たちからは利益を得ていると見られているのだらうと思っているということです。

(木村_浩) 今年は、学会員参加者が「自分はどう思っているか」ということを別に聞いているのですよね？

(土田) 別途聞いています。「利益を得ている」に関しては、「自分はどう思っているか」は 1.75 です。一方、「一般の人にそう見られていると思うか」は 3.25 です。ですから、自分たちは利益を得ていないと強く思っていますけれども、周りからは利益を得ていると思われているだらう、という認識だということです。

(木村_浩) この辺りもきちんと説明しないと勘違いされますね。

—— スライド 22 の結果から、「専門家が専門家として役割を認められた」ということが言えるのですか？ そこまでは言えないのですか？

(土田) サンプルが 9 人しかいないので、断定的なことは言えないと思います。この人たちはこうだった、ということまでは言えますけれども。

(木村_浩) あくまでケーススタディということですね。

—— 去年と今年を比べると、今年はまだ変化がなかったということですか？

(土田) そうですね。特に原子力学会員に関しては、去年ほど劇的な変化はありませんでした。

去年は、原子力学会員参加者で、「一般の人たちからつるし上げられるのではないかと思っ
て来ていました」という人が結構いましたよね。でも、来てみたらそんなことはなかつ
たと。今年も、私は参加できなかったのだから分らないのですが、つるし上げられることは
絶対がない、という人ばかりが集まったのですか？

(竹中) その傾向は若干あります。

—— 今年の場合、気づきが少なかったのだらうと思われる人が多かった印象があります。

去年は、特に若手の人たちで大幅に変わったように見える人がいたけど、今年はそういう人はあまりいなかった。そういう印象が数字にも表れているような気がします。

—— 前年度の結果はホームページに出ていたので、今年の参加者はそれを見てから来たのでしょうか？

(竹中) あまり見ていないと思います。第1回フォーラムでフォーラムに期待することを聞いていますが、去年の結果を見ていたら、そのときにそういうニュアンスが出てくると思うのですが、あまりそれはなかったのです。

(木村^浩) 母集団自体が変容したのかもしれません。原子力に対する関心の低下は観測されていますし、実は、専門家の関心も低下しているのかもしれません。それがこういう形で表れている、という気がします。周辺に関心が低下したから、逆に、ムラとしてやっても大丈夫な状況になっていて、2014年のフォーラムの相互作用の中で、学会員参加者はやはりという思いを強めた、という気がしないでもない。

(竹中) 定性的な分析でもそういった傾向は見えています。去年と今年を比べるようなことをシンポジウムで言うつもりはありませんが、結果としては、去年のほうが変化があります。

—— 母集団のほうの結果を見ても、学会員が自信を失いつつあるように見えます。

(土田) そうなのです。「原子力発電がないと経済発展できない」という意見も減っています。

安全が確保できるという意見は増えているのです。だから、原子力は危険なものではないという自信はあるのですけれども、原子力は不要なものではないか、と思うようになった原子力学会員がじわりじわりと増えています。

—— 動機は一般市民とまったく同じだと思います。原子力発電が全て止まって、3年以上経っても、生活に何も影響がない。だから、なくても大丈夫だったのかという思いを、一般市民も学会員も抱くようになってきた。それから、NHKの世論調査で、原子力は必要ないと思っている人がまだ40%も50%もいるという数字が、毎月のように報道されている。自分は大丈夫だと思っても、世の中の人がいままで経っても否定的だと、だんだん自信を失って、無力感を感じてくる。そういう傾向が読み取れます。

それと、原子力の有名な学者の方が、自分の信念は変わっていないけれども、技術者・科学者というものは、世の中の人々が欲することに努力を傾注すべきであって、世の中の人

が原子力はいらないと言っているのに、私たちが要るのですといつまでも言い続けることに疑問を持った、という論文を発表しているのです。

学会員の母集団のアンケート結果にそのような傾向が表れていると言えらると思います。

(木村^浩) では、よろしいでしょうか？

そうしたら、次は竹中君から、インタビューから見えてきたフォーラムの効果について話していただきたいと思ひます。25分を目安にお願いします。

(竹中) では、資料の3-2-3をご覧ください。ここでは、フォーラムの中で参加者がどのような変化をして、そのきっかけとなったのはどういふことか、といふことを話します。

スライド2のフォーラムの目的は、お互いに尊重することを目的にフォーラムをやっていふ、といふおさらいです。

スライド3は、コミュニケーションができるようになるためには、このプロセスがあるだろうといふことです。特に第2期は、このプロセスを参加者に意識してもらいながら、話し合ってもらいました。このプロセスに沿って、フォーラム参加者の変化を分析します、といふことをここでいふ。

スライド4は、そもそもフォーラム前は、参加者はお互いにどういふイメージを持っていたのか、といふことをまとめていふ。1年目と2年目の結果をまとめていふ。

市民の専門家に対するイメージは、上から目線で、難しいことを言ひ、気難しくて、壁を作ってくるような人、といふたものでした。一方で、専門家の市民に対するイメージは、デモ隊や反対派の人が多いのではないかといいたものでした。

1年目と2年目で、抱いていたイメージには少し差がありました。点線以下に書かれています。悪いイメージではないといふことで分けてあるのですが、2年目はこのイメージを持っていた方が多かったです。例えは、市民からは、専門家は専門知識を持っている人で、それくらいイメージしかありません、といふような中立的な意見も聞かれました。専門家からは、先ほど言ひていた、つるし上げられるのではないかと、いふような意見は1~2人からしか出ず、市民は無関心ですよね、いふような意見を言う人のほうが増えていたといふのが2年目の傾向です。

スライド5では、このイメージが最初にどのように変化していったのかといふことがまとめられています。実はフォーラム開始直後、コミュニケーションが始まる前と言ひてもいいかもしれないですけども、自己紹介や、顔を合わせて話をした段階で、思ひ込みが少しずつ変わっていました。

市民のほうは、最初は気難しい、上から目線の怖い人が来るのかと思ひていたら、意外とそうでもない、普通の人 came たな、いふことを、自己紹介の段階で感じ始めている。

自己紹介の中では、何に期待してこのフォーラムに来たか、ということも話しているので、そういうことを聞いて、この時点でもう変わり始めていると言えます。

一方、専門家も、反対派みたいな人ではないということに、早い段階で気づくということが、スライド 6 に書かれています。

そういった最初の思い込みが消えたところで、実際に対話が行われていきます。次は、「お互いに理解し、尊重する」というステップです。

まず、市民の変化を見ていきます。専門家にはいろいろな人がいて、いろいろな考え方があって、専門家を最初は一様に捉えていたけれども、1人1人違う人であるということに分かっていく、というのがこのプロセスです。

具体的には、「共通点を知る」ということで、専門家も同じ意見や同じ問題意識を持っていると気づく、ということ。もう1つは、同じ人間としての動きをすればいいでしょうか。悩みの内容が一緒というわけではないですけども、ああ、専門家も悩むのか、やはり同じ人間なのだなという気づきが挙げられています。不安や悩み、サラリーマンとしての姿。あとは、休憩時間などで原子力以外の話をしたら、普通に話せる人だった、ということに気づくということがあります。

一方で、「異なることを知る」ということで、ひとつは、安全の捉え方、不安の感じ方、あとは原子力肯定から入る態度は、違うと感じる。あとは、論理や定義、正確に話すことをこだわっている姿勢。専門用語を使うこと。そういうところは、やはり少し違うと市民が感じる点です。

スライド 8 は、フォーラムの中で作られた模造紙をデジタル化したものですが、なぜ入れているかという、見て分かるように、赤と青の付箋がごちゃ混ぜになっています。付箋を貼っていく段階で、市民も専門家も同じような意見を持っている、専門家の中にもいろいろな人がいるということに気づいていった、ということを行うために、この図を載せています。

スライド 9 は、フォーラムのテーマ一覧ですけども、ここでは、どの回をとっても、同じようにごちゃ混ぜの模造紙ができあがっていますよということをおっしゃるかと思っています。

スライド 10 は、専門家に、「お互いに理解し、尊重する」というステップのときにどのような変化があったのかということをもとめています。「市民にもいろいろな人がいて、いろいろな考えがある」というのは同じですが、少し違うのは、「話せば理解してくれる人もいる」という意味で意見を言う専門家の方もいたということです。どちらかと言えば「専門家と市民」という構図を崩さないで、説明したときにいろいろな反応がある、という気づきをしている専門家が見られるということを書いています。

「共通点を知る」については市民と同じで、市民も同じ意見や同じ問題意識を持って

る、ということに気づいています。

「お互いが異なることを知る」に関しては、やはり安全の捉え方や不安の感じ方はまったく違うということ。あとは、当然なのですけれども、原子力への関心や知識の度合いが低いこと。これは、予想していたよりも関心がない、知識がない、という意見です。

一番下書いてあるのは、専門家は、意識が高めの積極的な人たちだからフォーラムに参加しているのでしょうか、と思う方が非常に多いので、「フォーラム参加者」を見て、フォーラム参加者の中にはいろいろな人がいるということには気づくのですけれども、では他の「一般市民全体」にその気づきを適用するかというと、そうではない人も結構いらっしゃるということを行っています。

スライド 11 は、「お互いに理解し、尊重する」ステップまでのまとめです。これまで、お互いに思い込みがある状態、その思い込みの解消、そしてお互いを理解し、尊重するというステップについて話してきました。だいたい 3 回程度のフォーラムを経験すると、今まで市民または専門家を一様なものとして見ていたのが、1 人の人間として話すことができるようになり、尊重することができるようになります。お互いの異なっている点や共通点を知り、「異なることをあるがままに受け入れる」という意見が徐々に出てくるということを書いています。

ただし、その中身には少し差があります。市民からは、専門家の考え方を理解できるようになった、あるいは、専門家の意見の受け止め方が分かった、というような意見が聞かれます。専門家からも、同じように、市民の意見を受け入れられるようになったという意見が聞かれます。しかし、専門家からは、もっと専門家寄りにならないといけないのではないか、というような意見も多く聞かれます。「異なることをあるがままに受け入れる」とは少し違う意見が出てくるということで、少し差が表れています。

第 1 期と第 2 期では、第 2 期のほうが、2 番の「お互いに理解し、尊重する」までで終わる参加者が、市民、専門家ともに多かったです。3 番の「お互いが変わろうとして、コミュニケーションする」という変化が出たのは第 1 期の参加者のほうが多くて、第 2 期はそこまでは行かない人が多かったと。そういう差があります。

では、その「お互いが変わろうとして、コミュニケーションする」の中身をご紹介したいと思います。ここでは、自分が変わってもいいと思う、相手が変わろうとしていることを知る、という 2 つのステップがあります。

まずは市民側です。「自分が変わってもいいと思う」については、大きく 2 つあって、1 つは、原子力にもっと積極的に向き合っていないといけない、という態度変容です。もう 1 つは、専門家の考え方を理解できた、専門家の考えを理解する方法を知った、という変容です。

「相手が変わろうとしていることを知る」については、4 つ書いてあります。基本的には、

専門家が頑張っ説明しようとしてくれていると。こちらの知りたいことを考えて、丁寧に説明してくれている、フォーラムを通じて説明がどんどんうまくなってきている。そういうことを感じた、ということが書いてあります。

この黄色の矢印は、きっかけとその結果を表しています。例えば、「専門家の考え方を理解できた、理解する方法を知った」のきっかけとしては、専門家が自分自身の考えや主張、価値観の述べているのを聞いて、あとは、専門家が悩んでいる点や苦労している点を聞いて、という2つが非常に寄与していると。

また、今言った2つのきっかけは、「原子力にもっと積極的に関わっていかねばいけない」と思うきっかけにもなっている、ということです。それから、「相手が変わろうとしていることを知る」ということも、「原子力にもっと積極的に関わっていかねばいけない」のきっかけになっているということを示しています。

次は専門家についてです。「自分が変わってもいいと思う」については、1つが、市民の知りたいことをよく考えて、市民に対してしっかり説明しなければいけないと気づくということ。もう1つが、このフォーラムを受けて、自分の仕事をもっとしっかりやろうというような振り返り的な気づきです。

このように思ったきっかけとしては、やはり市民の態度が大きくて、話せば理解してくれる市民がいる、市民の原子力に関する議論に取り組む真摯の姿勢を知った、ということが大きなきっかけになっています。

スライド14は、変容のきっかけと、変容の内容の相関をまとめています。

市民は、原子力に関わろうとしたり、専門家を理解しようとしたりするわけですがけれども、これを見た専門家は、市民の知りたいことを聞こうとしたり、市民に説明する努力をより行おうとします。そして、この専門家の変容を見た市民が、また原子力に関わろうとする。ここは、市民が専門家を見て変わって、その変わった市民を見て専門家が変わって、というようなループがあるということです。

一方で、右下に点線で囲んである、「専門家の考え、主張、価値観を伝える、専門家の苦労や悩みを伝える」ことは、実は市民の「原子力に関わろうとする、専門家を理解しようとする」という態度変容のきっかけになっているのですがけれども、それを専門家が気づいているかどうかには疑問が残ります。というのも、インタビューで、専門家から、「こういったことを意識してもっとやろうと思いました」というような声は聞かれなかったからです。

スライド15には、市民に変化を引き起こすような専門家はどのような人なのかということをもまとめています。

今言ったように、専門家が価値観や主張や悩みを伝えることは大事なのですがけれども、

実はそれはフォーラムのような試みを3回程度やって、1人の人として見てもらった後にやれば有効だという話で、まずは1人の人として見てもらう必要があると。

その上で、しっかり説明するという態度を見せること。共感を示すこと。価値観や主張を述べること。悩みや苦勞を話すこと。市民の変化に寄与するような専門家の要件はこういうものですよ、とまとめています。

最後に、今回のフォーラムで見られた変化は、市民が専門家に近づいていき、それを知った専門家は、もっとこちらに近づいてくださいという努力をしようとするということで、専門家が市民のことをもっと知ろうとするような動きはなかった。シンポジウムではこの後木村先生から「対等」という話が出ると思うのですけれども、この動きが対等と言えるのかどうかは分からない、という話をして、締めようと思っています。

以上です。

(木村 浩) では、ご意見をいただきたいと思いますが、まずは私から。

市民と専門家の間での変化についてまとめていますけれども、市民同士の中での変化や、専門家同士の中での変化も出てきていると思います。そういうところを全部省略して、2者間だけで議論していると、「また二項対立だ」という批判が必ず出てくると思います。だから、市民が市民の存在に気づいていくプロセスや、専門家同士で悩むプロセスについても述べたほうがいいと思います。

—— そうですよ。専門家同士でも、別の専門家が上手に説明していて、聞いている市民にそれが明らかに受け入れられている、というシーンを見たことがあったと思うのです。そういうときに、ああ、こういう説明の仕方もあるのか、と感じた人はいたと思うのです。すぐに自身の態度にフィードバックされたわけではないでしょうが、何らかの影響は受けていたと思います。市民に寄り添うように、「どこが分からないのですか？ ここはこうですよ」と一生懸命説明する専門家の方がいましたよね。その人と同じ班にいた専門家も、自然とそういう態度に引っ張られている感じがあったと思います。

—— それがお互いに複数人でコミュニケーションをすることの大きなメリットだと思うのです。市民、専門家のどちら側にとっても。だから、今の木村先生のコメントは、どこかで触れたほうがいいかもしれません。

だけど、スライド14、15、16のまとめは素晴らしいと思いました。

—— スライド14で、点線で囲まれた枠について、「専門家がこの部分の重要性を気づいているのか、疑問」とありますが、これは竹中さんの意見ですか？

(竹中) インタビューの中で、市民の方は「こういうことがきっかけでした」とおっしゃるのですが、専門家でここについて触れる方はいらっしゃらなかったのです。

—— 専門家の方は、「主張、価値観を伝える、苦勞、悩みを伝える」ということに気づいていないのではなくて、気づいているけど恥ずかしくて、あるいは躊躇して、あえてそういうことを市民の人に言うほどの積極性を持たないで、自分の中に収めておく、というように感じるのですけれども。

(木村_浩) いや、気づいていないと思います。

—— こういうことを語る技術者は非常に少ないと私も思います。

—— だけど、政治家の演説を聞いていると、そういうところがやはりうまいですね。

—— 心情に訴えるのですよね。

—— ええ。そういうところをくすぐった演説のうまい人は、共感が得やすい。「政治家は、特に大統領や首相は、国民に対する演技者でなければならない」という発言をされた評論家の方がいましたが、確かにそうだなと。だけど、技術者には演技力がまったく不足している。だから、スライド 14 のこの指摘は非常に重要だと思いました。

—— 「演技力がないから言わない」のであって、気づきはしているけれども、諦めているのではないですか？

(木村_浩) むしろ、そういうことをやってはいけないと思い込んでいるのだと思います。

(竹中) そうだと思います。「専門家とはそういうものではない」と思っている。

—— 竹中さんがお話をするときには、そういうところを強調したほうがいいかもしれませんね。

(木村_浩) 結局、その思い込みによって、気づく機会すら与えられていないのです。こういうことを言うと、周りから、「科学者の風下にもおけない」と批判されるわけです。

—— でも、本当は、人間と人間のコミュニケーションということを考えていくと、こういうところに重要なエッセンスがある、ということですね。

—— 市民側は、この点線部分を知りたいというアクションは起こさないのですか？

(竹中) アクションまでは起こさないです。こういった発言が印象に残って、それで自分がこう変わりました、というインタビュー結果はあるのですけれども。

(木村^浩) 市民側にしても、専門家が苦勞をしているということに気づくきっかけがないわけです。想像できないことに気づくのは難しい。一度気づけば、次からは、「何かそういう苦勞はないのですか？」と聞ける人になると思いますが、その経験がないと、聞けないと思います。

—— 私がこの 2 年間を通じて感じたひとつのパラドックスは、ほとんど全ての市民の人は、知識を求めているのです。ところが、先ほどの会話のように、専門家から知識だけを供給されると、非常に反発するのです。このパラドックスに早く気づいて、説明の中に、先ほどから挙げられているような知識以外の要素を織り交ぜていくことが非常に重要だと思います。一方で、そちらばかりになって、知識がまったくなくなってしまうと、やはり市民側は不満だと思うし、かといって、知識や理屈ばかりまくしたてる人は拒否されると。こういうパラドックスがあるのです。

—— 市民は知識を求めているのだけど、知識だけを追求していくと、ある時点から素人にはまったく分からない世界に入ってしまうと思うのです。

—— 苦勞や悩みを伝える、だけではなくて、話し方やたとえ話なども関係があるのではないですか。

—— まさにその通りだと思います。女性はそういうことによくお気づきになるのですが、特に男性は気づきにくいのです。物語などを交えて話すと、相手も非常に受け入れやすくなるのですけれども、そうではなくて理屈一辺倒で、箇条書きみたいに論理だけと言って、それで話が伝わったと思いきこむ人が多いのです。

—— コミュニケーションをしているときの相手の表情を見たり、間の取り方を工夫したり、話の展開の仕方を工夫したりすることが大きいのではないかと、という気がします。

—— 数日前、テレビの番組で、脳科学者が、今おっしゃったようなことを「エピソード情報」と言っていました。理屈ばかりが並んでいると、記憶に残らず通過してしまう。そこにエピソードが何か加わると、記憶に残る、ということを書いていました。何か説明するとき、エピソードを織り交ぜて説明すると、ずいぶん違ってくるのでしょうか。

—— フォーラムに女性の専門家の方がいらしたのですけれども、女性の専門家は、専門的な話をする際に、生活感が加わるのです。だから、実感をもってその話がずっと入ってくるのだと思うのです。一般の方が抱えている不安感は、言うに言われぬものなので、その部分が解消されるということがあったと思うのです。だから、理屈、理論、科学的な情報だけでなく、そこにちょっとしたエピソード情報や生活感が加わることで、同じ情報でも受け入れ方がまったく違うと思います。

—— 役所は、よく、「相手の立場に立って、平易な言葉で、お互いにコミュニケーションする」という言い方をしています。私は、役所はそれを 1 回も実現したことがないと思っていますが。専門家はこの重要性に気づいてください、ということ、私は竹中さんに主張してほしいと思います。

(木村_浩) スライド 12 から 14 をよく見ると書いてあるのですが、コミュニケーションを通じて、専門家は、その重要性には気づくのですね。

(竹中) そうですね。スライド 12 の「相手が変わろうとしていることを知る」というところに、「市民の考えに専門家が共感の姿勢を見せてくれた」と書いてありますが、先ほど話に出てきた「市民に寄り添うように話す姿勢」などはこの中に含まれています。あとは、「市民からの質問に対し、(専門家が) 真剣に考え、悩んでいた」こと自体が印象的だった、という意見がインタビューで出てきているので、そういうところは市民も気づいていて、専門家もそういうことが大事なのだなと気づいています。

(木村_浩) その点には気づくけど、やはり伝えたい情報やその周辺にばかり気が向いてしまっていて、その他の情報に気がつかないというのがスライド 14 の主張なのです。なので、それは強調したほうが良いと思います。

—— 専門家に対するコミュニケーションの研修があってもいいのではないですか。

(木村_浩) あったほうが良いと思います。

(竹中) 難しいのは、一番気づいてほしい人たちが一番気づかないということです。

—— スウェーデンの最終処分場で働く人たちは、技術者であろうと、専門家であろうと、広報の人であろうと、まず市民と対話するコミュニケーションの研修を受けなければいけない、と決まっているのです。やはり、地域の人と対話するためのコミュニケーションが大切なのだと思うのです。

—— 前にもお話ししましたがけれども、GEは、幹部になるときに、ファシリテーションの研修を約1か月受けるのです。アメリカの大企業のトップは、話をするとき、演壇で原稿を読む人は失格で、必ずステージの真ん中に立って、身振り手振りで話をする。あれはそういう教育を受けているからできるけど、日本では、そんなことができる経営者は非常に少ないですね。それこそ演技者になるわけです。

—— 一種のパフォーマンスなのですよ。だけど、日本だと、「パフォーマンス」というと中身の無いものという意味で捉えられて、軽視されがちであるというのがひとつ。それから、相手に伝わるように話をする、つまり目線を下げて話をする、ということに、技術者や経営者は強い抵抗感を持っています。そういう話をする場に技術屋さんを連れていくと、「こんなことは私のすることではない」と言うのです。明らかに目線が違っているわけです。これは日本人の特徴なのかなと思ったりします。

だから、それではいけないのだと気づかせるような発表をしていただくとありがたいなと思います。

—— 今、「目線を下げる」とおっしゃいましたが、下げるのではなくて、「相手に応じて対応する」というふうを考える必要があると思います。

市役所が失敗しているのは、相手が何を知りたいか、どういうことに関心があるかということを見逃して、とにかく平易にすることに心を砕いているからだと思います。目線を下げるのではなくて、相手に合わせるという考え方にしないと、いつまで経っても失敗すると思います。

ただ、どうしても、目線を下げて、小学生や子供たちに分かるように、と思いがちなのですよね。私たちもついそういうふうに対応してしまうのです。でも、それはやはり違うのではないかと思います。子供にも分かるような言葉を使うのはいいけれども、相手は大人なので、その人に合ったものを、その人に必要とされているものを、という考え方に変えないといけないと思います。

—— その通りですね。同じ人格者として失礼にならないように。

—— 失礼にならないではなくて、相手が求めていることを言うということです。こちらでも、言いたいことは難しくても言ってもいいと思うのですけれども。ここは、市民も気がついていないかもしれません。難しい問題だと思います。

—— そういう意味では、スライド16の「非対称性」は非常に重要だと思います。先ほども話題に出ていたけれども、市民は、とにかく不安だということを理解してもらいたいので

だから、一方的にそういうことを主張してしかるべきだし、それでいいと思います。専門家のほうは、今まさにおっしゃったように、市民が何を不安に思っているのかを聞かないといけない。ただ一方的に平易に言うだけでは駄目で、今相對している人が何に不安を持っていて、何を知りたいのかということを知らなくてはいけない。そして、市民のほうに専門家のことを勉強してもらう必要性はまったくないので、やはり非対称なのだと私も思います。専門家のほうも、自分たちのことを考えてほしいなんて思う必要性はまったくない。不公平だけど、仕方がないということを理解する必要があると思います。

—— そこに気づかないといけませんね。私も、福島の人と対話をする機会があって、自身の不安について延々と、1時間も2時間も我慢して聞いてあげないといけないようなときがあって、これは一体なのだろうと。カウンセリングをしているみたいになるのですね。でもそれも、

—— 聞くだけで意味があるのですよ。

(木村^浩) では、こちらの資料についてはよろしいでしょうか？ 時間もありますので、次に行きたいと思います。

2. システム化について

(木村^浩) 次は、資料 3-2-4 になります。システム化について、シンポジウムで何を話すかということをお伝えしたいと思います。

私の主張はスライド 3 にまとめてあります。

「社会への実装」というと、とかく、これを多人数に実施するのは難しいのではないか、あるいは、これをそのまま持っていったらいいのではないか、という話が出てくるのですが、その前に、しっかりと要素技術として整理しておくことが必要だろうということで、「①フォーラムのシステム化」をやっているということになります。フォーラムというコミュニケーション・システムについて、要件を洗い出し、設計手順、適用限界を整理して、ドキュメント化しておくことが必要だろうということ。あとは、フォーラム運営に関わる資料・ノウハウを整理することも必要だろうと言おうと思っています。

「②フォーラムの試行に伴って明らかになった、より良いコミュニケーションに資する知見の整理」も、社会への実装には重要な話です。原子力に関わるトピックに関する市民・専門家の認識マップが、ある意味では意見を自分たちでまとめるという作業で出てきているので、こういうものを整理する。あるいは、先ほど竹中君の話の中に出てきた、話を聞いてもらえる専門家の要件を整理する。あとは、土田先生や竹中君の話に出てきた、フェ

一スタッフフェースによる市民と専門家のコミュニケーションによって、どのようなダイナミズム（相互作用）が生じるのかということに関して、N は小さいなりに、ケーススタディとしての経験知を整理しておく。こういうことをやっておく必要があるだろうということです。

単にそのまま持っていくと、間違っただけの使い方をして、結局効果がない、ということになりかねないので、そうではなくて、要素技術を要素技術として整理して、現場に持っていくときにはそれを適切に応用するという形にしてもらおうということで、システム化をやっているのです、ということをお話しています。

②に関しては、前段の 2 つの講演で紹介されているので、私のお話では、①について、具体的にどのように整理しているか、事例を紹介していきたいとお話しています。

例えば、スライド 4 は、コミュニケーション実現のためにどのような要素が必要でしょうか、という整理。スライド 5 はフォーラムを成立させるための要件です。

スライド 6 は、どのように今回のフォーラムを設計していたかということです。スライド 4、5 の要件を横軸に、フォーラムの要素を縦軸にして、どこでどの要件を満たそうとするのかということをお話して、漏れがないことをチェックする。このような方法論は使えるのではないのでしょうか、というような話。

スライド 7、8 は適用限界の話です。コミュニケーション実現の観点から、こんなことが見えてきたということ、あとはフォーラム成立性の観点からこういうことが見えてきました、という話です。

ここで強調しておきたいのは、スライド 7 の最後のポツで、最初は「専門家 VS 市民」という構図であるけれども、3 回程度のフォーラムを経験することで、「みんな 1 人の人間である」という視点に切り替わると。その結果、市民が同じ市民を見る余裕が出たり、専門家同士で話し合うことができるようになってきたり、フェイズが変わっていくのです。こういうことがその後の気づきに重要なのではないかとお話しています。

スライド 9 以降は、資料やノウハウということで、どのようなものがあつたかを話しています。コミュニケーション・ルール、ファシリテーション・ルール、あとはグループワークのサポート資料をまとめておくと、グループワークも楽になって、ファシリテーターの機能をお話して集約できますよ、という話。あとは、今回は記録の内容をお話して、すぐに公開するという方法をお話しています。

ということで、要素技術をバラバラにして、何を話していたかということをお話して、どれでもピックアップして使えるようにすることも重要な話です、ということをお話しています。

スライド 13 がまとめなのですが、フォーラムというコミュニケーション・システムを社会に展開するための素材をいくつか話したと。今回の総括として、本コミュニケーション・システムは、「思い込みと不信によるコミュニケーション不全という状況」から、リスクコミュニケーションをするための「最初の一步を踏み出す＝お互いの思い込みを打

破し、お互いを 1 人の人間として認識する」ためのシステムとして、機能する可能性が示されている。また、特徴としては、特定の専門家が必要とされない。だから様々な専門家が集まることによって、お互いの中でも気づきが出てくる。誰か 1 人が講師をするというものでもなくて、また、ファシリテーションのスキルも、大変は大変ですけれども、工夫次第ではそれほど必要ない（設計および資料に沿って行うことができれば十分な）システムとして設計されている。原子力に限らず、様々なトランスサイエンス領域の問題解決に貢献することのできる社会技術だろうと考えているということで、まとめようと思っています。

その後、パネルディスカッションに入るというスタイルを考えています。

—— グループワークのサポート資料は本当に素晴らしいと思いました。私のやっている世田谷区の区民講師の会で、20 周年記念フォーラムというものをやったのですけれども、そのときにワークショップをやりまして、この資料を参考に、自分たちの内容に合わせて作った資料をテーブルの上に置いてやったのですけれども、非常にうまくいったのです。こういうものがあるとまるで違うなと実感いたしました。

—— やはり「ルールに縛られている」というのが大きいと思います。ファシリテーターに言われると反発する人もいると思いますが、ルールはルールということで従う人は多いようです。

—— 「これを読んでスタートする」というのがよかったですね。ファシリテーションの経験がある人は、この資料を読まないで、自分の解釈で説明をするのだけど、間違った解釈をしている人もいて。まあ、上手に進められる方もいるのですけれども。この資料をもう 1 回読んでいただくと、皆がもう 1 回納得して、そこからしっかりスタートできた。特に最初の頃は、読むということが大切でしたね。

—— このルールを徹底することで、コミュニケーションの土俵がほぼ 8 割方できるので、これがなかったら、好き勝手に自分たちの言いたいことを言って、收拾がつかない。

だから、本当に、原子力に限らず、何らかの合意形成が必要な場合のコミュニケーションの場では、どこでも使える手法だと思います。

—— A3 に大きく印刷したのもよかったですと思います。A4 で小さい字で細かく書いてあることが多いのですけれども、A3 だとお年寄りでもよく見えますから。

—— 竹中さんの資料もそうなのだけど、模造紙のまとめが載っていますよね。付箋の色が 2 つあります。資料が一人歩きしたときのために、市民と専門家という注を入れたほう

がいいと思います。

(木村_浩) 確かに、説明したほうがいいと思います。でも、竹中君が、そういうことは説明するつもりです、と言っていましたね。

シンポジウムなので、資料も全て公開しますし、記録も作成して公開する予定なので、よろしくをお願いします。

3. その他

(木村_浩) それでは、資料についての議論はここまでにして、シンポジウム全体について、いくつかご相談したいと思います。

1つ目は、進め方なのですが、その前に、参加者の人数を神崎さんからお話しただけですか。

(神崎) 参加者は 42、3 名です。この中には、去年のフォーラム参加者、今年のフォーラム参加者も含まれます。運営側は、講師の方も入れて、約 20 名でしょうか。だから、全体では 60～70 名です。

(木村_浩) 基本的には、このシンポジウムについては学会に宣伝をしています。原子力学会と、社会・環境部会と、あとは社会心理学会ですか？

(土田) ええ。あとは、リスク研究学会も宣伝しています。

(木村_浩) なので、基本的には学者が参加される場になっています。あとは、メディア関係者がいましたね？

(神崎) はい。1 人だけいらっしゃいます。傍聴取材をしたいとおっしゃっていたので、記事になる前に文科省に報告義務がある、と伝えています。もしかしたら直接取材に来るかもしれない、そこはまだ分からない、とおっしゃっていました。

(木村_浩) フォーラム参加者には取材お断りなので、我々のほうで対応したいと思います。

あと、そのくらいの人数なので、質問票を配ろうと思っているのですが、どうですか？ パネリストからたくさん質問が出てくるなら質問票はいらないと思ったのですが、森田先生以外は内部の人間ですから。

(諸葛) パネリストは、発表した3人と、森田先生と、私ですか？

(木村_浩) はい。なので、質問票を配布して、休憩時間に回収して、代表的な質問にはお答えしていきましょうという形にしようかと思っています。

パネルディスカッションの流れとしては、最初に森田先生のご質問にお答えする。その後、質問票の中から代表的なものにお答えする。その後、森田先生からこの研究に関してのコメントをいただく。その後、今後の展開についてさらにディスカッションを深める。その後、時間があれば会場から直接質問を受けて、最後にパネリストに1人ずつお話しただいて、締めようと思います。

閉会挨拶ですが、岩田先生にお願いして、受けていただいたのですが、急きょお仕事が入ってしまったということで、キャンセルになってしまいました。なので、パネルディスカッションが終わったら、私が「これでシンポジウムを終わりにします」と言って、あとは司会の神崎さんが、「それではこれで終了にします」と言って終わりにする、という形にしようと思います。

進行についてはよろしいでしょうか？

もうひとつは、会場の準備についてです。可能な方は、11時に現地に集合いただきたいと思っています。12時半から受け付け開始を考えています。

—— 写真撮影などはお手伝いしなくて大丈夫ですか？

(木村_浩) 写真は撮りたいと思うので、では、そのお手伝いをお願いできますか。

—— タイムキーパーは要りますか？

(木村_浩) なくてもいいと思います。今回は、話すべきことをしっかり話していただきたいと思っています。前半は時間が延びてもいいと思っています。パネルのほうで調整するつもりです。なので、講演者の皆さんはそのつもりでよろしくお願いします。

さて、よろしいでしょうか。それでは、最後に今後の予定をお伝えします。

第4回は、翌3月に実施予定です。このときには、報告書をご紹介して、皆さんにご審議いただきたいと思います。

それから、3月20日に、原子力学会でセッションを行う予定ですので、よろしく願いいたします。

では、今回はこれで終わりにします。どうもありがとうございました。明日はよろしく願いいたします。

以上